

## (第十九章)

二無我を詳細に説く>時の本性が欠如すると示す>時が自性として成立したことを否定する> [章の著述を説く]

言う。「ここで君が、行為者と業が考察されることの副次的におこった、そのままの正理を続いて示したことによって、我が心の地に、堅固に大きく長い間強く生えている『事物が有る・無い』と見解する樹木の根をも良く動かした。しかしそれ故に、ここでも吾輩に役立とうという動機で、時が考察されるべきである。」

説く。よろしい。

言う。「ここで世尊が、それやそれにおいて三時<sup>1</sup>を教示された。無ければ教示であるとは適わぬので、三時とは有るのみである。

章の著述を説く> [三時が本性として有ることを総体として否定する]

説く。世尊が世間の名称に従って三時を示されたが、真如として三時は不合理である。それは如何様にといえば、ここで先ず、もし未来の時となって次第に現在となり、現在となってからも次第に過去となるのが、そう見れば一時となる。例えばツェトラが村へ行ったとしてもまさしくツェトラであるが、村より過ぎたとしてもまさしくツェトラであり、そこへ「行っていない」と「行った」と「過ぎた」の三性に分けることは無いが如くである。

もしまた、未来もまさしく他であるが、現在も他であり、過去も他であるとなれば、そう見るとしても、三つ共にまさしく恒常となるだろう。まさしく恒常であれば、時として考察されることはまさしく無意味となる。(何故ならば)必要性が無い故である。

三時が本性として有ることを総体として否定する>過去に相対した・相対していない二時制が本性として成立したことを否定する> [過去に相対した時が本性として成立したことを否定する]

また他にも、ここでもし「時」という何らかの事物が有るとなれば、それは自らより(成立する)か?相対して良く成立するとなるか?と問えば、そこで先ず、仮に三時制として相対して良く成立することを思惟すれば、それに説こう。

現在起こった時と未来が、  
もし過去に相対したならば、

<sup>1</sup> 三時：過去・現在・未来の三種の時。

現在起こった時と未来は、  
過去時に有ることになる。 1

現在起こった時と、未来の時が、もし過去時に相対して有るとなれば、そう見れば現在と未来の時は過去時において有るとなるだろう。過去にあるとなれば、その二つも過去になるだろう。そう見れば、一時制のみとなるだろう。一時制のみであるならば、相対したことは不合理であり、このように、まさしくそれが、まさしくそれに如何様に相対しようか。相対が不合理である故に、時も全く不合理である。

もし過去時が失壊し、滅して無いのみであるならば、それにこの二つが如何様に有るとなろうか。仮に、過去も有るのみであると思惟するならば、有る故に、現在であるとなるが、過去ではないので、それは主張しない。

言う。「『現在起こった時と未来は、過去に相対して成立する。』と言った時、如何様にその二つが過去に有るとなろうか。」

説く。何故ならば、「それに相対して成立する。」と言った、ただそれだけの故に、その二つがそこに有る背理となるだろう。そうでなければ、

現在起こった時と未来が、  
もしそこに無いとなれば、  
現在起こった時と未来は、  
如何様にそれに相対したとなろうか。 2

現在起こった時と未来の時が、もしその過去時に無いとなれば、そこに無いそれら現在起こった時と未来の時が、如何様にそれに相対するとなろうか。(何故ならば) このように、三つともに集まるとなれば、相対に合理となる故である。

もしまた、そこに有るとなれば、存在するその二つに対して、再度相対して何をしようか。そう見るので、先ず、現在起こった時と未来が過去に相対して良く成立することは、不合理である。

過去に相対した・相対していない二時制が本性として成立したことを否定する>

[相対していない時が本性として成立したことを否定する]

そこでこう思い、『現在起こった時と未来は、過去に相対していないのみにおいて成立する』と思惟すれば。

それに説こう。

過去に相對しておらず、  
その二つが成立することは有るのではない。

過去時に相對しておらずとも、現在起こった時と未来時のその二つが、自らより良く成立することは有るのではない。

それ故に、現在起こった時と、  
未来の時も有るのではない。 3

そのように、何故ならば現在起こった時と未来の二つは過去時に有るのではないので、相對したとは不合理であるが、過去に相對しておらずともその二つが成立することは有るのではない故に、現在起こった時と未来の時も有るのではない。

三時が本性として有ることを総体として否定する > [その正理を他の二時制に適用する]

まさしくこの順次の論法によって、  
残りの二つの錯誤と、  
上と下と中等や、  
一等についても知りたまえ。 4

まさしくこの順次の論法によって、残り二つの時の錯誤と、上と下と中や、一等についても知りたまえ。

現在起こった時と過去が、もし未来に相對して有るとなれば、そう見れば、その二つも有るとなる。そう見れば、現在起こった時と過去も未来であるとなる。(何故ならば)そこに有る故である。そう見れば、時は唯一つのみとなるので、それに相對することは不合理となる。相對が無い故に、それらも無い。

無のみである起こっていないその未来にも、その二つが如何様に有るとなるうか。もし、未来も有るのみであれば、有る故に、まさしく現在であるとなるが、未来ではないので、それも主張しない。

もし、その二つがそこに無いとなれば、それに如何様に相對したとなろうか。しかしながら相對したとなれば、そう見れば、有る故に、相對したと考察されることはまさしく無意味となるだろう。

未来に相対していなくとも、その二つが成立することは有るのではない。

その如く、過去と未来がもし現在に相対して有るとなれば、そう見れば、その二つもそこに有るとなるだろう。そう見れば、過去と未来も現在であるとなる。(何故ならば)そこに有る故である。そう見れば、時は唯一つのみとなるので、それにおいてそれが相対したことは不合理である。相対が無い故に、それらも無い。過去と未来は、失壞した故と起こっていない故に、無いのみであるそれらも、現在時に如何様に有るとなろうか。もしまた、有るのであれば、成立している故に、その二つにとっても、相対したことによって何をしようか。

相対していなくとも、その二つが成立することは有るのではない。

そう見るので、過去も有るのではないが、未来も有るのではない。現在も有るのではない。

三時が本性として有ることを総体として否定する> [他の三つ一組である法(現象)に適用する]

上と下も、もし中に相対して成立するならば、そう見れば上と下も中が有れば有るとなるが、自らより(有るの)ではない。もし中が無ければ、如何様にそれに相対して上や下が有るとなろうか。中に相対していなくとも、その二つが成立することは有るのではない。

そこでこう思い、『中が有れば、それら上と下が有る』と思惟すれば。

それに述べよう。三つとも有るとなれば、再度如何なる相対が必要か。相対が無くとも、それらより何れかが自らより良く成立することは有るのではない。そう見るので、上と下と中は自性より有るのではない。

その如く、上と中において、仮に下に相対して有るとなるのか?中と下は、仮に上に相対して有るとなるのか?始めと終わりは、仮に中間に相対して(有るとなるの)か?始めと中間は、仮に終わりに相対して(有るとなるの)か?終わりとの中間は、仮に始めに相対して(有るとなるの)か?近くは、仮に遠くに相対して(有るとなるの)か?遠いは、仮に近いに相対して(有るとなるの)か?

その如く、前と後や、同一性と別性や、そのもの(自性)と他性や、果と因や、短と長や、小そのものと大そのものや、我と無我や、有為と無為や、一と二は、仮に多に相対して(有るとなるの)か?一と多は、仮に二に相対して(有るとなるの)か?二と多は、仮に一に相対して、(有るとなるの)か?それらは僅かな何に相対して成立するとなろうか。それら一切の前述は、それらに有として現れることになる。(何故ならば)無ければ相対するとは不合理である故で

ある。

そう見るので、それら一切も、真如として自らより良く成立することは有るのではない。世間の名称に従って述べられるものである。

章の著述を説く > 自部・他部の主張をそれぞれ否定する > [他部（非仏教徒）が主張する時を否定する]

言う。『『相対していなくともそれらが成立することは、有るのではない。』と言ったことは正しくない。ここで時とは、刹那<sup>2</sup>や、臘縛<sup>3</sup>や、須臾<sup>4</sup>や、夜や、昼や、半月や、月や、季節や、閏や、年等の単位を具えると良く成立したので、それに相対して何をするのか。』

説く。

留まらぬ時として、捉えることはしない。

捉えられる対象である時が、

留まることは、有るのではないので、

捉えられていない時として、如何様に名付けられようか。 5

ここで、確実に留まる諸事物は、単位より捉えられるに適う一例えば「この木は高い。」「これは長い川である。」「これは短い。」「この象は大きい。」というように。時においては、全体として確実に留まる、ある単位から捉えられる対象は、何も有るのではない。

このように須臾も、僅かに過ぎたか、僅かに至っていない分を「須臾」と名付けるのであるが、全体として確実に留まる「須臾」というものは、何も有るのなければ、昼日等は言うまでもない。

そこでこう、『ここに確実に留まる刹那が有る』と思惟すれば。

それに説こう。「確実に留まる刹那」というものは、過去でもなく未来でもない。何故かといえ、確実に留まる故である。確実に留まらないのみである故に、それはそのようでもない。(現在に) 入る故に「現在」と述べられるのであれば、もしそれが確実に留まるのであればそれは成立したのであるが、(現在に) 入るのではないので、入るのでないものが如何様に現在であるとなろうか。そう見るので、確実に留まる時はまさしく有るのではなく、有るのではないそれ

<sup>2</sup> 刹那：最も短い時間の単位。勇者が指を一回はじく六十五分の一の時間。

<sup>3</sup> 臘縛：時間の単位。刹那の七千二百倍。

<sup>4</sup> 須臾：時間の単位。一昼夜の三十分の一。

を、如何様に捉えるのか。捉えられる対象として無いそれらは、刹那や臘縛や須臾等と、如何様に名付けられるのか。そう見るので、「時」というものに如何なる事物も不合理である。

自部・他部の主張をそれぞれ否定する＞ [自部（仏教徒）實在論者が主張する時を否定する]

ここで言う。「時は有るのみである。何故かといえば、印が有る故であり、前と後や、同時と非同時や、長期と早速等は時の印であるので、そのように印が有る故に、時は有る。」

説く。

もし、時が事物に依拠した（ならば）、

もし、それら「前」や「後」等が時の印であるならば、そう見れば、時とは事物のみに依拠して名付けられるのであるが、自らより良く成立したのではない。

言う。「そうではない。時は自らのみより良く成立した。『時』というものは、「前」や「後」等は因であり、それよりそれら（前後等）となるものが時である。」

説く。

無事物の時は、何処に有ろうか。

事物に結ばれずに、君の時が自らより良く成立し、確実に留まることが合理であると何処でなろうか。不変恒常である因時が確実に留まるのであれば、果が別であると如何様になろうか。

もし、前世となったツェトラと後世となったグプタにおいて、その者が本性不別として留まるならば、別であるその二人は、それによって如何様に（二人に）されたとなろうか。ツェトラとグプタの二人は、自身として前後に別ではないにもかかわらず、前後の時よりまさしく前と後になった。しかし時そのものが別でなければ、その二人が別であることを、時が如何様に為したとなろうか。

阿闍梨聖提婆も

「果と因は別であるので、然れば恒常は有るのではない。あるいは、因

の有るところ。そこに果は有るのではない。」<sup>5</sup>  
と説かれた。

もし、その二人は不別であるけれども、時に基づいて別でないならば、そう見れば、「別」という言葉が無い故に一切が別か、一切が別では無くなるだろう。

そう見るので、事物のみに依拠して時が名付けられることが合理であるが、事物に結ばれずに、他として確実に留まる時が有るとは不合理である。

言う。「時は事物に依拠して名付けられるのみであり、『一須臾存在した。』『一日存在する』『一ヶ月存在するとなるだろう。』というので、それ故に、時は有るのみである。」

説く。もし、事物そのものが有るとなれば、時は事物に依拠したのかとも問われるが、

如何なる事物も有るのでなければ、  
時を見て、有ると何処でなろうか。 6

「如何なる事物も不合理である。」というまさしくそれが、前述で既に良く論証されたので、それ故にもし、時は事物に依拠して良く成立すると思うならば、その事物は何も有るのではないので、君の時が今有ると何処でなろうか。

言う。「もし時が有るのでなければ、そう見れば違いが無い故に『為したとなった。』『為す。』『為すとなろう。』というそれらの叙述が全く不合理なものとなるが、合理も有るので、それ故に時とは有るのみである。」

説く。先に

「述べられる対象は退いた。」<sup>6</sup>

と示した時、「それらの叙述は不合理である。」という言葉は、君が僅かに言っただけに尽きるが、それらのみに尽きず、一切の叙述も不合理である。世間の名称に従って、それら一切も合理であり、それについても、

「一切は、清浄と、非清浄と、」<sup>7</sup>

と示されたのである。

<sup>5</sup> 「果と…ではない。」：『四百論』第 9 章 18 偈。「果によって因は失壞した。然れば、因は恒常ではない。あるいは、因の有るところ。そこに果は有るのではない。(パツァブ訳)」

<sup>6</sup> 「述べ…退いた。」：『根本中論』第 18 章 7 偈 1 行目。

<sup>7</sup> 「一切…非清浄と、」：『根本中論』第 18 章 8 偈 1 行目。

そう見るので、「時」という如何なる事物も無いと知るべきであり、依拠して名付けられたと成立する。

時が自性として成立したことを否定する > [章の名を示す]

「時を考察する」という第十九章である。

DECHEN 訳